

天文台の裏方さん

安藤 博*

それぞれの社会には華やかな面がある一方、それを支える人達、いわゆる裏方さん、がいる。私達は、東京天文台の片みす、いや真中かも知れないが、天文機器の試作・補修をする工場のスタッフ、まぎれもない東京天文台の裏方さんである。

あるときは観測団員に組み入れられ遠く外地までも機械と共に出かけ、1チャンスの観測に精魂こめて観測器の設置・調整に取り組むこともしばしばある。また参加しないときでもそのような観測計画がでると現地想定のもとに観測器の整備・改良、あるいは小道具の製作に幾月も（長いときは二年越になることもある）取り組むこともめずらしいことではない。このように天文機器の補修・改良にあたるときいつも感じられるのは、よき先駆者達の努力の跡がしのばれることである。私などはまだまだ若僧なのでその度毎に学び、より良きものへの執念で闘志を燃えあげると共に、技術的には老練になっても仕事に老化は禁物と深く反省をする。

しかしいつもこのように華々しいものばかりではない、観測器の試作、実験器具の製作などになると何やら訳のわからぬことにスタッフ一同思い悩むことも多い。不勉強のせいかも知れない。研究というもの未知の世界を究明しようとするものであれば資料不足の仕事がでるのも当然なのかも知れない、学者の方々も考えの末のことだと思ふ。作り替えの繰返しもたびたび、製作途中のアイデア変更もしばしば、実験担当者も重ね重ねの変更気にまずそうに足を運ぶ、やはり人の子だと思ふ。しかし取越苦勞である。実験・研究がそのような要素をもつものであれば止むを得ないことであろう。私達もそう心得ている。だが内心では一度でこの実験が成

* 東京天文台実験工場

1970年11月の太陽黒点 (g, f) (東京天文台)

1	—, —	6	9, 66	11	12, 59	16	7, 204	21	9, 142	26	—, —
2	11, 84	7	10, 119	12	6, 88	17	—, —	22	13, 141	27	—, —
3	10, 45	8	11, 93	13	7, 93	18	8, 276	23	—, —	28	8, 45
4	11, 104	9	6, 65	14	8, 132	19	—, —	24	9, 86	29	7, 36
5	8, 101	10	9, 73	15	—, —	20	—, —	25	9, 39	30	13, 64

(相対数月平均値: 136.3)

昭和45年12月20日

印刷発行

定価 125 円

編集兼発行人 東京都三鷹市東京天文台内

印刷所 東京都文京区水道2-7-5

発行所 東京都三鷹市東京天文台内

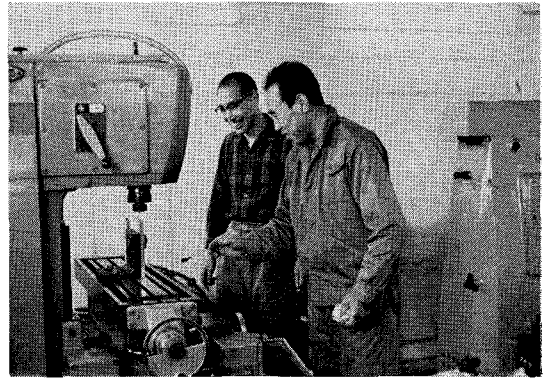
電話武蔵野 31局 (0422-31) 1359

森本雅樹

啓文堂松本印刷

社団法人日本天文学会

振替口座東京 13595



功するよう祈りながら一つ一つの実験器具、部品、あるいは模型を精密に作りあげるのが常である。

ふりかえって古き時代の天文学を支えた人、進めた人達の使った観測器を学ぶのも仕事のうちである。想像を絶する精巧さに深く感じ入り、あの時代にどのような工程でこの巧緻さを作りだしたかは私などのような浅学の身では遠く計り知れない。おそらく当時の観測機器は天文学者が観測技術者が観測と合わせて長い年月をかけ、心ゆくまでいく度となく修正に修正を加えて作りあげた名器であつたろうと思う。ここでもおそらくレンズを磨く人、地金を作る人、部品を作る人などそれぞれ、名人の陰の力が実っているのだと思う。

もちろん、いわゆる天文台の裏方さんと呼ばれる人達は、私達ばかりではない。いまでは数多くの職種に分かれて多くの人達が活躍している。身近なところで工場関係のことばかり書いた。そしていつも私達は語り合い励まし合っている。小さな小さな力かも知れないが大きな天文学を陰ながら支えているのだと。